



(號二十八百二第)

正法の宣傳と近代式の迫害 主任 松尾鼓城  
罵詈毀辱刀杖瓦礫 御書の一節  
人と道 (軍人精神) 大僧正 本多日生  
日蓮聖人教義綱要(第十回) 僧正 井村日成  
法華經流布の時代 文學士 小林一郎  
機微譚語 (六) 玄米は面倒  
(六二) 不好愉快  
(六二) 頓珍漢語 山根青村  
課題和歌「海邊初秋」發表 子爵 清岡長言選  
免因保護に就て 鈴木信海  
誰罪偶語 野口五生  
統一俳句、雜報等

所輯編一統町前山白川石小京東 所取扱務事行發  
▶番三三五三三京東座口替振◀

著師生日多本 正僧大

大藏經要義

大藏經要義 正價各壹圓八拾錢 內地送料 各拾貳錢

大藏經要義 正價各壹圓八拾錢 內地送料 各拾貳錢

大方廣佛華嚴經(八十卷) (一)華嚴經の大觀 (イ)總論  
(ロ)此經の位置 (ニ)此經の教主 (三)此經の設時、說處、說者  
(ハ)華嚴宗の略歴 (ニ)華嚴宗の列教 (ト)華嚴宗の教義 (チ)傳  
數の批判 (リ)日蓮の批判 (ヌ)予の華嚴觀 (ニ)此經の傳  
譯 (三)此經の譯者 (四)此經の五支 (五)此經の傳  
通覽(六)要文の講述

卷一 佛性論(一) 卷二 佛性論(二) 卷三 佛性論(三)  
卷四 佛性論(四) 卷五 佛性論(五) 卷六 佛性論(六)  
卷七 佛性論(七) 卷八 佛性論(八) 卷九 佛性論(九)  
卷十 佛性論(十) 卷十一 佛性論(十一) 卷十二 佛性論(十二)

大般涅槃經(四十卷) (一)大般涅槃經の總論  
(二)大般涅槃經の教主 (三)大般涅槃經の設時、說處、說者  
(四)大般涅槃經の略歴 (五)大般涅槃經の列教 (六)大般涅槃經の教義  
(七)大般涅槃經の批判 (八)日蓮の批判 (九)予の大般涅槃觀  
(十)大般涅槃經の傳譯 (十一)大般涅槃經の五支 (十二)大般涅槃經の傳通覽

佛光大藏經(八十卷) (一)佛光大藏經の總論  
(二)佛光大藏經の教主 (三)佛光大藏經の設時、說處、說者  
(四)佛光大藏經の略歴 (五)佛光大藏經の列教 (六)佛光大藏經の教義  
(七)佛光大藏經の批判 (八)日蓮の批判 (九)予の佛光大藏經觀  
(十)佛光大藏經の傳譯 (十一)佛光大藏經の五支 (十二)佛光大藏經の傳通覽

法華經(十卷) (一)法華經の總論 (二)法華經の教主 (三)法華經の設時、說處、說者  
(四)法華經の略歴 (五)法華經の列教 (六)法華經の教義 (七)法華經の批判  
(八)日蓮の批判 (九)予の法華經觀 (十)法華經の傳譯 (十一)法華經の五支  
(十二)法華經の傳通覽

阿含經(八十卷) (一)阿含經の總論 (二)阿含經の教主 (三)阿含經の設時、說處、說者  
(四)阿含經の略歴 (五)阿含經の列教 (六)阿含經の教義 (七)阿含經の批判  
(八)日蓮の批判 (九)予の阿含經觀 (十)阿含經の傳譯 (十一)阿含經の五支  
(十二)阿含經の傳通覽

律藏(八十卷) (一)律藏の總論 (二)律藏の教主 (三)律藏の設時、說處、說者  
(四)律藏の略歴 (五)律藏の列教 (六)律藏の教義 (七)律藏の批判  
(八)日蓮の批判 (九)予の律藏觀 (十)律藏の傳譯 (十一)律藏の五支  
(十二)律藏の傳通覽

經藏(八十卷) (一)經藏の總論 (二)經藏の教主 (三)經藏の設時、說處、說者  
(四)經藏の略歴 (五)經藏の列教 (六)經藏の教義 (七)經藏の批判  
(八)日蓮の批判 (九)予の經藏觀 (十)經藏の傳譯 (十一)經藏の五支  
(十二)經藏の傳通覽

論藏(八十卷) (一)論藏の總論 (二)論藏の教主 (三)論藏の設時、說處、說者  
(四)論藏の略歴 (五)論藏の列教 (六)論藏の教義 (七)論藏の批判  
(八)日蓮の批判 (九)予の論藏觀 (十)論藏の傳譯 (十一)論藏の五支  
(十二)論藏の傳通覽

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可  
大正七年七月十五日發行(毎月一回十五日發行) 統一事務取扱 東京市小石川區白山前町 統一編輯所

▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所(▲本誌定價一冊  
發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎(▲印刷人鈴木日雄(十錢郵稅五厘)▼)

版五日蓮主義

一、宗教の必要と其選擇  
二、神佛三教と日蓮上人  
三、破佛論と宗教の信仰  
四、統一的佛敎觀  
五、(付録)本經、祖書要文

三、五判洋裝函入眞蹟挿入  
美本六百五十頁正價金九  
拾五錢送料六錢

版四修養と日蓮主義

一、日蓮主義の主張  
二、社會問題と日蓮主義  
三、修養と日蓮主義  
四、日蓮聖人と女性

三、五判洋裝五百六  
十頁其他正價送料  
共同斷

版再國民道德と日蓮主義

一、日蓮聖人の觀たる我が國體  
二、國民道德と宗教的信仰  
三、國民道德と模範的人格  
四、國家觀の根本問題

三、五判洋裝  
四百七十餘  
頁其他正價  
送料同前

人と教

一、人と教  
二、精神の修養  
三、三大思想の系統と調整統一

四、六判洋裝函入眞蹟挿入假附  
本三百八十餘頁正價金壹圓貳拾錢  
送料八錢

版再法華經の心髓

一、名如來壽量品統釋  
二、項目八十八ヶ條

四、六判洋裝假名附四  
百二十頁正價八十錢送  
料共

大藏經要義刊行會

東京市外南品川妙國寺内(振替東京三二五九六)

改正定價並に廣告代價

一冊十錢、郵送分は別に五厘申受候  
○前金送金分に限り郵送料申受ず候  
○代金未済の方へは六ヶ月目乃至一ヶ年  
目毎に御便利上集金郵便差上ます(但  
此場合郵便局手数料五錢加算仕るべく  
候)

故に郵便送り當方より集金のものは半  
ヶ年六拾八錢、一ヶ年壹圓卅一錢申受  
候但し一ヶ年讀者の方より前金御送金  
は壹圓廿錢にて宜しく候  
送金は振替貯金口座東京三三五三番  
統一編輯所に御拂込を乞ふ(もよりの  
郵便局にて御拂込み下され度、確實に  
御座候小爲替は紛失のおそれ有ます  
領收證は特に御請求以外は本誌上に表  
として取附め掲載します  
廣告料は一頁特別十五圓、半頁八圓五  
十錢、三分一頁六圓  
▲五號活字十八字詰一行二拾五錢  
交換及び義務廣告は断り申候

御注意

●多數中の事に付若し雜誌不配達の際は御一報を乞  
ふ、早速御送本可仕候  
●當方より集金郵便差上候節、多數の事に付計算相違、  
又は二重御請求等の手違ひ候節は御面倒ながら御一  
報下され度願求候節は御面倒ながら御一  
集金郵便差上候節、何かの御都合にて御拒絶の方も  
有之候、左様の節は其御放任なく、集書にて一寸其  
旨御一報下され候へば、引續き御送本申上候。又御  
取消の事併せて送本を中止仕るべく候。又御  
多の場可有御返事は往復はがきの以外は御返事仕  
諸君の熱心御盡力に依り我統一が宗教雜誌界中に於  
謝し申候

日蓮各宗 寺院 御僧

法衣 草木 (直に御聯想下  
され候儀に候)  
京都 三條通鳥丸東入ル町  
草木本店  
電話 中七三五番  
振替口座東京二四五九番  
東京淺草區三好町二番地  
草木支店  
電話 下谷三四三四番  
振替口座東京二四五六八番

佛像佛具 調度所  
位牌木釘

●有も神佛具を調製する敬虔心を以て奉仕候  
●普通品定價郵券貳錢封入送呈  
▲普通品定價郵券貳錢封入送呈  
總本山妙満寺  
大本山本國寺  
日宗各教團  
京都寺町四條南大雲院前  
御用達  
電話 下三二五八番

舊名「乾清」師  
大佛師 辻井岩次郎  
振替大阪八一五七番  
電話 下三二五八番  
●御用仰せ被下候は、叮嚀深切を旨と致候

正法の宣傳と近代式の迫害

正義の布傳には必ず一種の流言、罵詈、迫害等が伴ふて  
來ねば其色彩が濃厚に見られぬ。釋尊に九横の大難と外道  
の讒奏があり、天台智者大師は得一大德に頓狂人と罵詈せ  
られ、傳教大師は護命僧都景律師等に巧言を吐いて世間  
を誑惑するものなりと罵詈されて居られる。日蓮聖人に對  
しての迫害は流罪死罪等數へるに違なきは世人の既に知悉  
せるところであるが、これは經文の「如來の現在すら猶怨  
嫉が多い況んや滅後をや」で、此の所謂「滅後」が天台傳  
教の二師では物足りなく、聖人が其記文に當つて居るとし  
て自ら喜んで居られるところである。しかし武藏前司の  
佐渡下狀に「日蓮弟子を引卒して悪行を巧む」とある。悪  
行を巧むの一言は餘程聖人の心肝を衝動したと見えて御書  
(法華行者值難事)には「此狀に云く悪行を巧む等云々」と特筆  
されて居られる、そして「自分ばかりで佛在世にも超過せる  
大難値遇者であるから釋迦、天台、傳教の三人に加ふるに  
我日蓮を以てし都合四人が正義傳燈者であらねばならぬ、  
而も今末法に於ては經の明文に照して、日蓮の外に行者と  
しては見當る者がないてはないか」と謂つて居られる。常

正法の宣傳と近代式の迫害

交換廣告及義務廣告御断り

みたから

八月號出づ

以後申込者に限り送附することとせり  
○改名廣告  
從來の「顯恕」を自今左の  
如く改名致候  
廣島 島田日聞

念珠ならば小野嘉助店へ  
日蓮宗各本山御用達  
顯本法華宗妙満寺御用達  
●御念珠各種  
弊店の特色は實用を旨とし從來  
調進仕り候へば多少に不拘御用  
命願上候  
京都市寺町通藥師下ル  
念珠商 小野嘉助  
電話 中二六〇八番  
振替口座大阪一九七二〇番

樂院日經上人の迫害は日蓮聖人の迫害よりも規模は小かつ  
たけれど迫害の様態はヨリ痛烈であつたから經師は「釋尊  
御在世よりも蓮祖の時、蓮祖の御時よりも今の日經の時が  
迫害は苛酷を極めて居る。されば之より推して見て日經は  
正義の傳護者であらねばならぬ」と絶叫して居られる。總  
て正義の布傳には罵詈や迫害が加はるのであり、それが上  
代よりは末世に至るだけ痛烈慘酷を増加するものとすれ  
ば、今日大正の時代の正義布傳にはどんな恰好で罵詈や迫  
害が襲來するであらうか、之を問題として考へるのも亦興  
味がないでもない。  
我大正立憲法治國の聖世に於ては法律の明文以外には死  
罪も流罪も施しやうはない、軽い違輕罪に處せらるゝにし  
てもが法律に背かねば罰せらるゝ等もない。現今の公明嚴  
正なる國法に於ては正義なる宗教を之と駢行し傳道して少  
しも無理迷惑を見出さないものである。國法に罰せらるゝは  
罰せらるゝだけの罪惡を其人が構成して居るのであつて、  
如何なる場合に考へても宗教宣傳の爲に之を迫害として裁  
能はぬのである。換言すれば宗教家は公明な國法に觸れる

やうな事を仕てはならぬのであつて、只單に正法を唱へて國法に觸るゝといふやうな事は宗教の自由を憲法に保障してある限りあり得べき事ではないのである。若し文部省の管轄に屬する既成教團の内容に革命を唱へ、宗制宗規に反する場合にのみ管長は之を宗團から取り出すであらうが、此外に別に今日は專制時代のやうな取り立て、云ふやうな迫害は來る筈がないのである。

罵詈毀辱刀杖瓦礫 (御書の一節)

去る正嘉元年太歲丁巳八月二十三日戌亥の刻の大地震と、文永元年太歲甲子七月四日の大彗星、此等は佛滅後二千二百餘年の間未だ出現せざる大瑞也、此大菩薩の此大法を持ちて出現し給ふべき瑞なる歟。尺の池には丈の浪たらず、瑞現じがたし、誰か知らん法華經の滅不滅の大瑞なりと、二千餘年の間惡王の萬人に告ぐる、謀叛の者の諸人にあだまる等、日蓮が失もなきに高きにも下きにも、罵詈毀辱刀杖瓦礫等ひまなき事二十餘年也、唯事にはあらず。過

ウカと凶籤を引いたやうに出來合することがないでもない、之を大正の罵詈毀辱として新らしく一個に數へねばならぬまい。此他に生活難を數へたい、今日の宗教家が種々の事情があつて生活上の窮狀を呈して居ることは事實らしいのである。次に宗教家の操持清節である、己れ自身自己を毀損し内的迫害をやつて居ることも斯種の一に算して見たいやうな氣がする。但若し新聞の災厄に會したるの時、始めて大正式の罵詈毀辱の滋味を感じし、此に一段の發奮心を振ひ起し得るならば斯人は正義布傳の資格あるものとしてよいのである。故に後來の宗教家が新聞雜誌の責道具に戰慄くやうては甚だ弱蟲であつて天下の大宗宗教家とは見られないのである。

去の不輕菩薩の威音王佛の末に多年の間罵詈辱せられしに相似たり、而も佛彼の例を引いて云く、我滅後の末法にも然るべし等と紀せられて候に、近くは日本遠くは漢土等にも法華經の故にかゝる事有りとは未だ聞えず、人は惡んて是を云はず、我と是を云はば自讃に似たり、云はずは佛語を空くす過あり、身を輕じて法を重んずるは賢人にて候なれば申す、日蓮は彼の不輕菩薩に似たり(乃重)彼は二百五十戒の上慢の比丘に罵れたり、日蓮は持戒第一の良觀に讒訴せられたり、彼は歸依せしかども千劫阿鼻獄におつ、此は未だ渴仰せず知らず無數劫をや經ぬらん、不便も不便也。

人と道 (軍人精神)

前號の續

本多日生

此の道理を國家に移せば陛下は絶對の權威と無限の恩恵とを有せらるゝので、人民は其の懿徳に服従するのは天の道であります、此項は馬鹿な人間が出來て來ました、恩を受けても頭を下げないと云ふのです。此の恩徳に感謝をして、報恩を計るのが人で、報恩を知らぬなら畜生です。此の報恩と云ふのは日本文明の特色であります。犬でも馬でも主を知り、恩を報ゆるのです。尙一つ大切な事は服従です。人間としては是非守らなければなりません、之が親に對すれば孝道となり、主に對すれば、忠道となる、諸君は忠臣蔵の芝居を見たでせう。其の中に寺坂吉右衛門と云ふ二人半扶持の足輕があつたが、復讐の同志に加らんとして、大石内蔵之助を酒宴の場所に訪れて其志を述べると、足輕風情かと馬鹿にして、取り合はない。すると寺坂が、千石取らふ

が、二人半であらふが、主の恩に變りがあるかと憤然として怒つた、すると大石は感動して、同志の仲間入を許した。又諸君の先祖で、水戸の學者に藤田東湖と云ふ人がありましたらう、かの有名な正氣の歌を作つた人です。其の東湖先生が安政の大地震に、始め自分は逃出したが親が出ないので救んとして、再び家に這入つて、母親を負ふて、出やうとすると家が潰れたので頭を棟で壓へられて死にました、其時に母を腹の下に入れて、両手を突張つて、死んだのです、それを母親は助かりました。先生の心には孝の真心が漲つて居つたから、親を救ふ事が出來ました、是が克忠克孝と云ふのです。二人半でも、主の恩は一つであると云ふが尊いのです。これが天地の公道、人倫の常經で守り易く行ひ易いのです、然し道德觀念が衰へて來ると、孝行なんか、

面倒臭いとなつて、豚になつて終ふのです。忠臣蔵の九太夫は、それを表はしたもので、如何程縁を貰つて居たつて、駄目、殊に軍人としては氣節を尊び、道德を重んじなければなりません。武士は玉も黄金も何かせん。命にかへて勤めやはする。それだから諸君の地位は尊くして、高いのであります、貧乏を救ふのも、政治に參與して國に盡すのも皆尊いが、之等に國があつて出來る事、國が亡びたら駄目になります、故に諸君の務めは他の何事よりも最も直接に國を守護するのて高く尊いのです、統一の道德と云つて、一切の道德は皆之から出て來るのです、軍人が國家を守るから一切の善事が行はれる、教育事業にせよ、救済事業にせよ皆軍人の務が根本をなして居るので、鎌倉武士の氣骨は此の觀念から來たと申します。昔一人の僧侶があつて、吉野山に櫻を觀に行きまして、歌を作つた、柱は檜、魚は鯛、小袖は紅梅、花はみ吉野。

そうして、其の頭へ人は武士!! と皆善い者だけを並べたのです、家を作つても槍の柱となると立派ですなあ、魚でも、あの美しい大きな鯛がゆらゆらと泳いで居るのは立派でせう、軍人は其の鯛です、他の人は、平目や、鱈で、びく／＼跳ねまはつて居るのです、美人が着るとしたら、紅梅小袖は似合ひます又花に比喩へると、吉野の花が、武士です、諸君軍人と云ふものはかく尊いのです、實に光榮ではありませんか、而し其名譽には責任が伴ひます、それだから、人の道である、君に忠、親に孝は盡さなければなりません。世の中は一人ぼつちぢやだめです、諺にも旅は道連れ世は情とあるやうに、例へば一寸停車場で雪隠に行ふと思つても、小さな荷物でも、人に頼まにやなりません、獨りて何もかも持つて、這入るわけにはなりません。世の中は互に助け合ふ所に妙味があるのです。て軍人としては恩義に感じ、責任を重んじて、奮起せねばなりません。正成が後醍醐帝に呼び出されて、朕は汝を頼むと仰せられた、聖慮に感激して

偈は末世弘經の人の踐むべき、相狀を説けるもの、三類の敵人は何人が受けたるか、悪口聲して數々擯出せられたるは何人なるか、塔寺を遠離せられたるの人何處にありや、佛陀の誠言に適中したるの人として果して何人を擧ぐべきや、或は世俗の事の爲めに、利養の爲めの故に處を逐はれ人に惡まれたるは數多けれども、法華經の爲めの故に難に遭へるもの果して幾人を數ふべきやである。抑も佛陀の續言に應じて、法華經弘通の爲めに、我大日本帝國に降誕せられたる大偉人を誰とか爲す、茲に唯一人あり、能く佛記に符合して本化の菩薩たることを認め得べきである、其御名を「日蓮」と云ふ、日蓮聖人こそ本化上行の再誕と仰ぎ尊信し師と憑み奉るべきの大偉人である、聖人は人皇八十五代後堀河天皇の御宇貞應元年壬午二月十六日房州長狭郡東條の郷小湊に降誕、弘安五年壬午十月十三日武州池上に入寂を示し給ふまで、六十一年間の清濁は、之を佛記に照して殆も符契を合はすが如く、寸毫も違目はないのであつて、本化の菩薩の再

僅に八百の手兵を掲げて、北朝八萬の敵に當りました、その恩義に感奮するのは軍人精神であります、諸君、諸君には大切な手紙が来て居ます、最も尊い御手紙です、其中には、  
朕は汝等軍人の大元帥なるぞ!! 汝等を股肱と頼む!!とあります。寝ても起きても、此の御手紙を忘れてはなりません。股肱であるとの御言葉に感じて、陛下に盡さねばなりません、朝顔を洗つても、先づ此の御手紙を思ひ出し、それからなければ、飯を食つてはなりません。軍人の道を善く考へて、命にかけても其本分を盡さなければなりません。人として

# 日蓮聖人教義綱要 (第十二回)

井村日成

## 第參章 僧伽論

### 第四節 末法の大導師

法華經如來神力品の會上に於て、末法弘教の付屬を受け、濁惡の世佛法紛亂の

尊いのは、此の無限の恩恵に感激し、絶對の權威に服従する所にあるのです、諸君は軍隊にあつては、良兵となり、家に在つては良民とならなければなりません。曾つて聞きましたが「私の村では五人兵隊に出たが、歸つて來ると酒を飲やうになり、生意氣になつて、却つて村の青年の風儀を悪くする」と、斯ふなつては、いけません、軍服の手前に恥しくないやうな、立派な軍人とならなければなりません。  
(本講演は宇都宮野砲兵第二十聯隊日井少尉の要領筆記なり此に其の好意を謝す)

誕であることは毫も疑を挿むの餘地がないのである、吾人は但信仰の爲めに故意に聖人の歴史を彩色するのでは無い、事實は最も有力なる證明で、聖人一代の事蹟は之を打消することは出来ないのである、聖人が降誕の時に於ける奇瑞は或は東洋一流の傳説として其信を措くに足らずとするも、其立教開宗以後の事蹟は勸持品の經文に符合して居る、聖人は天福元年癸巳御歳十二にして、房州清澄山に登り道善坊を師とし延應元年十八歳にして難髪す、爾後、京都、南都、高野、比叡等の諸寺諸山に遊學して、各宗の蘊奥を學習して、其何れも佛陀の眞意を失ふを見究めて故郷に歸られた、建長五年御歳三十二歳にして其所信を發表すべく決意せられ、四月二十八日拂曉旭日に向つて南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と十返御題目を御唱なされたのである、南無妙法蓮華經とは本佛世尊の本化の菩薩に付屬せられた法體たるものである、結要付屬の大法末法救護の大良藥此外に求むべき無、故に先づ其法體を宣示せられた、引續いて清澄山持佛堂に於て、僧俗

男女の大衆の前に堂々と其所信を發表せられた、其所説の大要は神力付屬の趣旨に依り、佛教諸宗の分裂は佛陀の本意にあらざる旨を痛説せられたのである、佛法は必ず一法に統一せられねばならぬ。若しも佛弟子として、佛法分裂の輩あらば城者破城の大罪人として墮獄疑なきことをお説きに相成つたのである、處が此説を聞いて、地頭東條左衛門景信は深く彌陀念佛の教に泥んで居るが爲めに、其所説を聞き分るの智識無く、是非を究めずして、佛の惡、法の敵と叫はりて遂に聖人を逐ふて清澄山より去らしめたのである。此最初の出來事は勸持品の文の「遠離於塔寺」の文に符合したのである而して聖人一期の巨難は古來四箇の大難と唱へて居るか、一は松葉が草庵の焼打、二は伊豆東ヶ浦の謫居、三は小松原の刀杖、四は佐渡の流罪である、龍の口の法難は佐渡流罪と一連にする、其他の小難は數知れずと聖人御自身の御言葉であるが、此等の諸難は何れも佛記に明かなる處である、經文に  
有諸無智人惡口罵詈等及加刀杖者

と説く、小松原の刀杖の難及び龍の口の法難の如き加刀杖の文に符合せるものがある、草庵焼打は遠離塔寺の文に契當する、伊東と佐渡の流論は數々見擧出の文に符合する、經には三類の敵人ありと説く、聖人の在世極樂寺良觀は持律を擧つて、其行儀六通の羅漢の如く、慈悲救濟の事に専らにして世人以つて生如來と稱せりとぞ、而も内心怨嫉を懷きて、日蓮聖人に對しては其要路に讒して無事を苦しむるの態度に出でたるが如きは、全く經文の潛聖増上慢に契當するものがある、其他無智の道俗擧つて聖人に對して惡口罵詈等し、邪智詭曲のもの多々なりしは俗衆増上慢道門増上慢の輩である、斯る上慢無智の道俗の中に於いて、不屈不撓其所信を披瀝して倦ざるは實に本化の再來にあらずんば爲し難き事である、佐渡流罪論以前に於いては聖人自ら經文の數々見擧出の數々の二字に契當せざるを以つて自ら本化の流類にあらずと謙下せられたるも、佐渡の流論に依つて數々の二字を身讀して、勸持品の二十行の偈は全部之を身に讀めり、豈に本化

の菩薩にあらずやとの自覺に達せられたのである、寺泊御書に(遺文六九九)勸持品に云く有諸無智人惡口罵詈等云云日蓮此經文に當れり、汝等何ぞ此經文に入らざる、及加刀杖者と云々、日蓮は此經文を讀めり、乃至數々見擧出數々とは度々なり、日蓮擧出度々流罪は二度なり乃至過去の不輕品は今の勸持品、今の勸持品は過去の不輕品なり今の勸持品は未來の不輕品たるべし、其時は日蓮は即ち不輕菩薩たるべし、乃至當世三類の敵人は之れ有るに八十萬億那由陀の諸菩薩は一人も見へ給はず日蓮は八十萬億那由陀の諸々の菩薩の代官として此を申す、と申されたが、此は未だ本化の菩薩とは申されんが、述化の菩薩の代官として申すとあるが、而し此御書の次に當木殿へ賜つた御書中には、寺泊より還し遣し候し時法門を書き遣し候き、推量候らむ、已に眼前也、佛滅後二千二百餘年に乃至一大事の秘法を此國に初めて之を弘む、日蓮豈其人に非ずや、前相已に顯はれぬ、

日蓮租之を勘ふるに是時の然らしむる故也、經に云く一名上行云々、彌々佐渡に御渡りに相成つてからは、日蓮より外に本化上行の再誕はあるまいとの事を明白に申されてある。開目抄に於いては、日蓮法華經の行者にあらざるかと云ふ疑を擧げて色々の方面から研究して、どうしても日蓮で無くは法華經の行者は無いと云ふ決論に至ると云ふ事を科して説きに爲つた、何れに致しても本化の菩薩として佛陀の使命を果すべく此世に御出現に相成つた方は日蓮聖人より外に此人であると指名する人は一人も無い、但日蓮聖人計りが、本化の菩薩の再來として、吾等末代の人々を御救ひ下さるゝのであると云ふことを御領解領ひ度いのであります、上來申上げた様の譯合であるから、日蓮聖人を末法の大導師として尊信し歸依を捧げ、日蓮聖人を師として尊信し歸依を捧げ、我等衆生の信念とが結合するのである、日蓮聖人の一期の弘通は一切衆生をして本佛世尊の大慈悲在すことを會得せしめて、本佛に渴仰すべきことをお教下されたのである

更に申せば佛陀の根本中心として、本佛釋迦牟尼佛あるを教へ、教法の統一中心として妙法蓮華經あるを教へ、僧伽の中心として、本化の菩薩なるを教へ、三寶恭敬の根本元意を把持せしめ、而も其中心を逸せざらしめて、其信仰の歸向する處を「二」に結んで、本門壽量の大木尊として顯示せられたのが、即日蓮主義である。以上申上げた事て略日蓮聖人の末法の大導師たる意味はお分りの事と思ふが、茲に一寸御注意申上げて置かねばならぬのは、日蓮聖人をあまりに尊信して、爲めに本佛世尊を打捨てる様な主張を爲す人がある様に見えますが、是は甚だ心得違の事と思ふ、種々理窟を捏ねて最もらしく言ひ廻してある様であるが、我々の單純な理想として

量品には此關係を醫師と使とに分ちて説いてある、本尊抄の中に末代の遣使還告は地涌也と御示に爲つて本化の菩薩は使人であることは明白にお示に爲つて居る例せば本佛世尊は一國の帝王である、本化の菩薩は各國に差遣せらるゝ大使公使の如きものである、大使公使は各其本國を代表して全權を委任せられて各國に駐在して居るが、常に本國君主の指揮命令を受けて、其任地に活動して居るのである、然るに我は全權大使なるが故に、本國の君主を忘れても善い、命令を奉じなくとも善い杯と云ふものがあつたならば、直に召還せられて所罰せられねばならぬ

らない、それと同じ關係である、如何に附屬し終つたからと云ふて、本佛が隱居したり、衆生救濟の實力を失ふと云ふ様な考を持つのは大變な心得違である、日蓮聖人は本佛世尊に對して、絶対に忠實であり、尊信者である、然るに末世無學の徒輩が、聖人を尊信するの餘り、却つて聖人の御主張を打破るが如き説を爲すは逆路伽耶陀の大罪人として情地獄疑なさいものと思ふのである、諸君は其様な行過ぎの説に惑はさるゝことなく、忠實に日蓮聖人の主張に聞いて、本佛世尊の大慈悲に攝取せらるゝ様、其信仰を維持せねばならぬこと、信するのてあります。

# 法華經流布の時代

(統一開に於ける 講演速記)

文學士 小林 一郎

## ▲一天四海の實現は何時か

御存じのやうに、今より六百六十年は

かり前に當り、日蓮聖人が安房の旭の森で始めて南無妙法蓮華經の題目をお唱へになつた。其時の聖人の持つて居られたお心は、此法華經の教と云ふものを、日

佛敎の教主は佛陀であらねばならぬと云ふ事は申すまでも無い事て、佛陀の外に教主ありと言は、所謂眞言亡國の破言を蒙りたると同様の意味で打破られねばならぬ、又附屬を受けた菩薩が、本師世尊を廢立して自ら取つて替るが如き事あらば當然叛逆罪と爲るであらう、壽

本は勿論のこと、世界中に之を廣める、即ち一閻浮提に廣める、斯ういふのであつたのである。此法華經を一閻浮提に廣めると云ふ事は、實に大切な理想でもあり、又さうなると云ふ確信を以て始められたのである。之を、地面を礎を以て撃つと同じだ、地面を礎を以て撃つには決して外れると云ふことはない、其通り此教が世界中に廣まる、斯う云ふ事を聖人自身が書いて居て居る。それ以來、殆ど七百年を経た今日それが世界中に廣まつたかと云ふと、是が世界中に廣まる所ではない、日本中に廣まることすら容易ではない。是は一體どうしたことであるか。一閻浮提に廣まると言はれたことは嘘であつて、一種の附景氣のやうなものであるかと云ふ問題を起さなければならぬことになるのである。

ふことを考へなければならぬ、又はは單り日蓮聖人ばかりの問題ではない、お經の中にも其事が書いてある。後五百歳の後には此教が一閻浮提に廣まらなければならぬと云ふ事を豫言されて居るのである。所がそれが廣まらなるとすれば、お釋迦様も嘘つきにならなければならぬ。さうなると是はなかく大變な問題である。日蓮聖人も嘘つき、お釋迦様も嘘つき、其嘘つきの書いたお經は信ずることから出来ぬと云ふことになる譯でありますから、是はなかく大問題になるのである。

▲宗教は學問と違ふ

是が學問であればさういふ心配は要らないのである。學問といふものは人間の智慧の力でやるのであるから、例へば一冊の本の中に半分嘘があつた所が宜い、悪ければ止すだけである。所が信仰と云ふものはさうはいかぬ。信仰は自分の身體と心とを擧げて信ずるのであるから、其中に少しでも嘘があれば之を信ずることが出来ない。世間には往々にして、一

い。お經なり聖書なりの良い所を取つて編上げたなれば、私でも宗教は作れさうであるけれどもさうはいかない。完全に出来上つたやうで御尤もであつても、そこに總が入つて居なかつたならば人間を動かすことは出来ない、だからして世の中の學者はそこを心得なければならぬ。そこが學問と違ふ。學問は理窟に合へば宜い、宗教は、成程良い、御尤もである御尤もであるが氣が進まぬと云へば仕方がない。朝起きといふ事は良い事である朝起きをする利益を擧げた本などもある身體にも良い金が儲かる、世間の風儀も良くなると云つても、何だか知らないが睡れば仕方がない。是は理窟にはない。併し何だか睡いといふのを飛び起さるには、そこに大なる力を以てやらなければならぬのである。

るのである。それであるから此問題は、お互が能く解決して置かなければならぬと思ふ。是はどうしたもののであるかといふ事が、是が今日私が申上げたいと思ふ事である、法華經流布の時代といふのがそれであるのである。

▲滅び行く世の人と

法華經

一體法華經といふものは何の爲に説かれてゐるかといふ事を先づ考へて見なければならぬのである。是は一體誰の爲に説いたお經であるか。法華經を讀んで見ると、釋尊が之を説かれたのは、是が分つたなら佛になるべき許を與へるといふことであるけれども、それよりも寧ろ本當の意味は、お釋迦様は當時のお弟子に之を與へられたのではなくして、末世のもの一切の人間に眞の考を與へたいといふ趣意から法華經が説かれたのである。末世といふのはどういふ時代であるかと云へば、人間が段々にガリ／＼になつて来て、自分の都合ばかり考へて、他人の事も國の事も考へない、段々人間が

の教の中には、何か良い所があるものであるから、其良い所を取つて信ずれば宜いと言つて居るものがあるが、それは大いなる間違ひである。人間は智慧だけで生きて居るものであるならば宜いのであるが、なかく人間と云ふものは智慧ばかりでは生きて居られない、そこに「何となく」といふことがある。其何となくと云ふのが力が強いのである。人相書を拵へて、眉はどう云ふのが良い、目はどう云ふのが良い、鼻はどう云ふのが良い、口はどう云ふのが良いと、ちやんと其人相書通りの人間を拵へて来て、さアどうだと思せられても、蟲が好かない、何處が悪いと言はれても何處も悪い所はないがどうも何だか蟲が好かぬのは、好きにならうと思つても好きになれない。色も黒い、鼻も高くない、併し何だか好きだと思へば仕方がない。世の中の事はそんなもので、さう目錄書通りにはいくものでない。

此教と云ふものも其通りで、結構な事ばかりで満ちて居つても其教の何處かに弛みがあれば本當に信ずることは出来な

激しく争つて、火の出るやうな、阿修羅のやうな状態になつて行く時、それが末世である、斯ういふ事が書いてある。法華經の中には法の滅び行く時の有様が詳しく書いてある、さう云ふ、世の中が滅びんとする時の爲に此法華經を遺して置くのだと云ふのである。それは何故かといふと、其理由は色々所に説明してあるのである。涅槃經の中に、子供が幾人もある、それは皆同様に親が可愛がつて居るけれども其中に一人病氣の子供があれば、親は其子供を一番心配する、其子供に病がある爲に親の慈愛が一番濃がれる、斯う云ふ事がある佛様は此世界を皆自分の物と思ひ、衆生を皆我子なりと思つてお救ひになるのである。そこに佛様の慈悲心が最も多く働いてある。そこで段々世が末になつて来て、人間の心が峻しくなつて来て、どうなるかといふ時に向つて、之を救ふ所の最も勝れたるお經が豫め遺されて居る、斯ういふ風に解釋して宜からうと思ふ。

### ▲善惡兩有の人間と 薬の必要

教といふものは薬である、死んだ人間に薬は要らぬ、病氣だから薬が要るのである、其病氣も、薬を服ませれば癒る見込があるから服す、人間が皆佛様になつたら宗教といふものは要らない、又、人間が皆悪人でも善人になる見込がなかつたならば同じく宗教は要らない、所がお互人間は、悪人でもあり又善人でもある、お互と言つては失禮でありますけれども、自分の心を調べて見ると、佛様のやうな量見も多少あるけれども、亦怪しい量見もある。さう言ふと腹を立て、俺は泥棒をしたことはない、と言ふかも知れないが、それは當てにならないのである、成程泥棒はしないかも知れないが懐ろ手をして歩いて居る、往來に藁口が落ちて居た、大分膨らんで居ると云ふ時には、懐ろの手がムツ／＼するのであるそれで其ムツ／＼した手を伸ばせば泥棒である、伸ばさないから泥棒にはならぬのである、泥棒であるか泥棒でないか

と云ふことは、其手を伸ばすか伸ばさないか、一尺が二尺の差であつて、實に頗る怪しいものである、所が、能く新聞などを見て、賄賂を取つた者があると怪しからぬと云ふ、けれどもそれがどれだけ怪しからぬか、一萬圓の賄賂を取つたと云ふ事は、悪いと云へば悪からうけれども、百圓の月給を取つて居つて七十圓分の仕事よりしなければ三十圓分といものは賄賂も同じである、三十圓宛の賄賂の濟し崩してある。併しさう悪い所ばかりではない、人間には善い心持もある。惡にても善にてもどちらにもなる病人であるから、そこで薬の必要が出て來るのである。

### ▲疑念は最終の目的 でない

自ら侮つて、俺は駄目だと思ふ人間には薬は効かない、又薬の効くと云ふものは妙なもので、餘り神經質の者には薬は効かない、今より十年ばかりも前に私は湯島の順天堂病院に入つたことがありますが、私の居つた室の直き向ひの部屋

に同じ病氣の人が二人入つて居つたのであります、一人は船頭の妻君でありました、其又隣の部屋に居つたのは醫學士で此二人が同じ病氣である、所が船頭の妻君はサッサと癒つて退院したけれども、醫學士の方はなかく癒らない、船頭の妻君の方は何も知らないから一切病院を信じ切つて居る、何を服しても、之を服めば癒る、之を食へば癒ると定め込んで居るから、薬をやつても能く効くので直きに癒つてしまつたのである、所が醫學士の方は、今日は動悸がするから心臓に異状があるのではないか、熱があるが是は呼吸器が悪いのではないか、牛乳などを飲んで効くか知らぬと、色々に疑を懐いて居るからなかく癒らない。だから人間と云ふものは、クヨ／＼して居たら到底癒るものではない、一番初めに疑ふと云ふことは、是は悪いことではないけれども、其疑ふと云ふことを終局の目的であるかの如くに考へて、どんな有難い事を持つて行つても跳ね付けてしまふと云ふやうなことで宗教の研究をして居れば、いつまで経つても今の醫學士の

やうなものである。

### ▲重い病氣に良い薬

なか／＼人間と云ふものは始末が悪いが其始末の悪いと云ふことが今の時代は尙更らそれに輪をかけて悪いのであります、何故なれば、今日の教育と云ふものは人間を疑はせるやうに疑はせるやうにして居るのである。學校教育と云ふものは成る可く、物は怪しいぞ、確かと思つてももつと調べて見ると、と云ふのであります。尤もそれではなければ學問と云ふものは出來ないのであります。それに今は昔とは大變違ひ、昔は老人と若い者とさう違ひはなかつた、親父もお侍で大慶至極と云つて居れば、息子もお侍で大慶至極と云つて居つたのであります。所が今はさうはいかない、心持も違ふが仕事も違ふ、今日のやうな日は、親父は草履を賣つて居れば大慶至極であるが、息子は傘を賣つて居ればちつとも大慶至極ではない、之だから始末が悪い皆心持がチグハグだから、ツツかり信ずることか出來ないことになるので、又信

じて居れば酷い目に遭ふのである。向う向けと云はれて正直に向うを向いて居れば飯を食ふことが出來なくなるかも知れないのである。

昔はさうでなかつた、老人の方は、若い者はどうも信仰が無くなつたとか、墮落したと色々言はれますけれども、さう言ふ人の若い時でもなかく當てにはならないのであります、赤ん坊の時からさうであつたやうな事を言つて居るが、それはいかぬ、随分當てにならないもので若い時には、さう有難い有難いて固まられるものでない、さう云ふ時代と云ふものはあるのであります。殊に段々難かしくなつて來て、今日のやうな時代になつては、大抵の教では跳ね付けられてしまふと云ふことになる、そこで病氣が重い。病氣が重いから、其時にどうしても、跳ね付けることの出來ないやうな一番良い教一番良い薬を持つて來なければ治まらぬと云ふことになる。是が所謂四十餘年の間眞實を顯はさないで、其時に無上道を説くと云つて、此法華經と云ふものを末の世の爲に遺されたのであると思ふ。

### ▲一番良い教を

それでありませうからして、どうしても此法華經がずつと世の中に廣まるには、是では堪まらないと云ふ時に押付けられなければならぬ、中位ならどれでも宜いと云ふことになる、一番良い薬を使ふのは風邪を引いた時ではない。風邪を引いた時にはアンチピリンである、一寸した怪我をした時には石炭酸で宜い、併し命に關すると云ふやうな病氣や怪我の時には一番良い薬を使はなければならぬ。斯う云ふ命にも關するやうな時に、いつか風邪を引いた時にアンチピリンを服んだら能く効いたからあれを服まうとか、摺むきの時に石炭酸で洗つたからあれでやつて見やうと云ふやうなことは違ふ、薬は症に依つて違ふのである。お念佛を唱へて居つた、それで宜かつた時がある暑いと思へば暑い、寒いと思へば寒いと悟りを開けばそれで宜かつた時代もある所が世の中は段々切迫して來て、どうにもならぬ時には、先の事より目の前が大

今飯を一杯食はして呉れた方が有難い、暑いと思へば暑い寒いと思へば寒いと悟つて見ても、戦場で鐵砲の弾が中つても痛くないと思へば痛くないと云つた所でドンと来れば死んでしまふのである。それであるからどうしてもさう云ふことではいかぬ、それで役に立つた時代もあるけれども、世の中が段々切迫して来ては誤魔化してはいけない、そこで此時に始

機微譚語

山根青村

六一、玄米は面倒

一千八百四十九年は米國の大飢饉にて各州ともに米麥登らず民皆菜色あり、中にも北部の諸州は殊に甚しき不作にて、金氣屋を潤すの資産家と雖も、日々の食物を求むるに窮する程なりしが、此處に素貧苦となん呼べる一の懶惰生あり、此人豊登の歳に於てすら公費の救助を受けざれば衣食する能はざる境界なれば、況

して斯る飢饉に際し坐食し居らるべきにあらず、さり迪又斯る凶歲に一州の厄介奴を公費を以て救助すべくもあらざれば、一州の公民は協議を遂げ、不憫ながら此厄介奴を生きたら埋葬することを得策なりと決し、素貧苦にも其由を言ひ含めたるに本人も早速承諾しければ、取急ぎ粗末なる棺桶を出來て是に入れ墓地がりさして昇せたり。然るに途上一人の老翁あり通り過ぎながら昇夫に向ひ、誰人の

葬禮ですか、例の素貧苦です、エ、彼人は死ましたか、イヤ死んだてはありませんが、御存じの通り平素餘り怠惰で此節柄食ふ事も出来ませんから生き埋めにするので、是には本人も同意だと云ふ事です、ソレは餘り残酷だ文明國の體面にもかゝる、食へぬとあらば少しなれど米を五升計り與ふるほどに、素貧苦強て死ぬことは見合してはドウヂヤ、忽ち棺中聲あり、「ソノ米は春たのですか」、イヤ玄米です併し貴公自身で春くなり他人に春せるなりするがよい、棺中再び聲あり、「イヤ玄米ならば面倒だ、昇夫早く棺を遣れ。」(今古雜談)

懶惰も此處迄来れば徹底的なり、併しこの徹底は實た談にあらず、厭ふべき徹底なり、徹徹底なり、唾棄すべし。人若し自己の職業に熱誠ならず、どうにか成るだらう的態度を執るとすれば、开は生殺しなり、素貧苦の懶惰と五十歩百歩なりと知らざるべからず。由來人類は横着極まる動物なり、僧然り俗亦然り、兎角は勤めず働かず而も他人よりより以上に安樂の生活を營まんとす、开處に厭ふべ

地獄餓鬼畜生の芽出は萌すなり、斯くて朝暮不愉快極まる悶々の生を送るなり若し夫れ信仰に活きて歡喜法悦の生を營まん乎、艱難何のその、困厄偶々吾玉を磨くべく、勇氣凛々百難を突破して理想を遂行するの意氣進る、經に能令衆生發歡喜心と説き給ひしもの則ち是れ、曲れる根性骨は何處迄も矯むべきなり、僞れる生活は一日も早く打切るべきなり、奮ひ起り勇み立ちて元氣よく現實の斯人生に活躍すべし、是れ則ち勇猛なり、是れ則ち精進なり、是を戒を持ち頭陀を行ずる者と名く。

聖語 曲れる木は直なる繩をにくみ、僞れる者は正しき政をば心に合せずる也。(新池殿御返事)

六二、不好愉快

米國南北戦争の時、敵愾の氣は全國に満ち到る所戦争の談を聞かざるはなし、一日或る紳士然たる壯年一村落到り村民を集めて一場の演説をなし、特に局を結ばんとするに當り一段聲を張り揚て曰く「往矣往て我が國土の爲に戦へ、往て

我が獨立の爲に死せ、我國土の爲に戦ひ我が獨立の爲に死するは、抑も亦愉快ならずや」と。やがて演説終りし時、來衆の一人進み出て「足下は國家の爲に戦ひ獨立の爲に死するを愉快なりと云ふ、焉んぞ足下自ら進んでまづ其愉快を取らざるや」と詰れば、演説家は此不慮の攻撃に當惑の色見えしが、且らくありて曰く「余は不幸にして愉快を好まず。」(同)

聖語 糞を集めて梅檀となせども焼く時は但糞のほひ也、大妄語を集めて佛と號すとも但無間大城なり。(報恩鈔)



課題「海邊初秋」表發

子爵 清岡長言選

○天 下谷區中根岸町六二 小柳威之允  
磯ちかく風まち居れば三日月に  
こゝろほそまの秋は來にけり

○地 常陸若松村 窪田 純榮  
ま帆片帆港へ船のいつこより  
秋の初の風や載せけん

○人 千葉縣山武郡東金町 萬新舎一止  
よる波の音も昨日にかはりつゝ  
袖しの浦に秋風ぞ吹く

○佳作  
打つ波も松の葉風もさえわたりうらしつかにも  
秋は來にけり 静岡縣 佐原 弘風

○吹上の濱 千葉縣 笠見 榮也  
しら波の秋のいろこそ見へにけれ風もすゞしき

○明石波よせてはかへす波ことにあきのはしめの  
いろや立つらむ 千葉縣 醍醐 榮司

○曉にねさめてきけば和田の原なみの音にも秋は



### 六三、頓珍漢語

昔東都に一客あり、或青樓に遊びけるに壁間掛る所の衣裳箱の畫幅を觀て曰く、「妙なる哉文晁」と、一妓側に在り笑つて曰く、「これ文晁(文鳥)にあらず鶴のみ」と、客爲に索然たり。其後客又一妓家に遊ぶ、酒酣にして談偶々、此事に及ぶ、即ち曰ふ「某樓の妓は文晁の何物たるを知らず、痴愚笑ふ可き也」と、一老妓座に在り、揚々得色を爲して曰く「文晁は小鳥なり鶴とは羽色も異なれり」と、客是に於て呆然として言なし。(珍談集)

愈々出て、益々矛盾、呆然として苦笑の外なし。生兵法は大疵のもと、一知半解の徒が博識顔の駄評を聞く程、可笑もまた面憎きものはなし、世の日蓮聖人を月旦して、豪傑僧となし、一廉の政治家と評し、其他種々の駄評を試みるもの、多くは祿々聖人の傳記集をも繙かず、遺文録をも通譯せずして、たゞ口から出まかせの無責任極まるもの、十中八九は成て居ない事受合なり。博士樗牛は言へり、日本民族の祖先に日蓮聖人を有するは我

等の光榮なりと、然り聖人の人格と教義宜しく敬虔の態度もて研究すべし、研究より鑽仰、さては信仰に歩を進むべし、心あらんもの請らば賤妓の文晁評を學ぶこと勿れ。

聖語 當世牛馬の如くなる智者共が、日蓮が法門を假染にも毀るは、糞犬が獅子王を吠へ癡猿が帝釋を笑ふに似たり。(善無思三藏鈔)

### 免因保護に就て

鈴木 信海

社會が進歩するに従て複雑となり、而して生活が困難になり、其結果は心ならずも人の物を手にする様な恐ろしい心得違ひをする人が少くない、人間は一度此の恐る可き悲しむ可き犯罪を犯した結果はどうであるかと言ふと、親兄弟にけ見離なされ、社會からは葬むられ、遂には自暴自棄に陥入り、二犯三犯の累犯者となり、一生非國民となり畢る様な経路を踏む人が随分珍らしくない。

一體宗教家は此の如き無頼の徒の出るのを未然に防ぐ使命を有すると共に、反社會的惡事をした人々を指導して再び恐る可き罪惡を犯さぬ様にするものも、亦我々傳道に従事する人々の任可き責任であらうと思ふ。惡人を善人に指導する實際的の仕事は免因保護事業

である。

我宗門では此事業に干與して居る人は甚だ少ないが淨土眞宗及キリスト教殊に救世軍などでは中々大規模にやつて居るものか随分澤山ある。

我宗徒に千葉縣下には夫々免因保護に關する團體があり、又感化救濟事業の講習などにも選はれた人も三四人はあるが、實際に免因保護事業に干與して居るものは誠に少ない、僅かに中村日錦師が個人的にやつて居る外は殆ど皆無同様の有様である。

自分は常に免因保護に従事して見たいと思ひ、色々研究を續けて居りますが、他の人々にも國家の爲め一つ熱心によつて欲しいと思ひます、今參考の爲め、免因保護事業に關する沿革及現在如何なる状態にあるかを述べましょう。

此事業を始めた最初は今より百四十年前、即ち西曆一千七百七十六年北米合衆國の費府に囚人救助會なるものが設立されたのを以て嚆矢とする、其後十八世紀より十九世紀に至る迄歐羅巴大陸に於て盛に經營された。

我國に於ては明治二十二年に金原明善氏が静岡に還善會社なるものを設立されたのが初めの始まりで、其後明治三十年英照皇太皇崩御の節特赦減刑の恩典に浴せし、出獄人多數に上りし爲め、此事業も大に發展せられ、夫れより引續き明治天皇の崩御に次ぎ今上皇帝の即位の大典により益々盛大となつた。

司法省に於ても保護事業の必要を認め、之が保護費として帝國議會に協賛を求め、三萬圓の豫算を得、優良なる保護會に補助を與へ指導に努力され大正二年保護會の事務の連絡統一を計る目的で、東京に中央保護

免因保護に就て

會なるものを設立し監獄協會が監督の任にあたられた。

越て例のシーメンス事件の突發の當時、三井家に於ては此の事業を被輔し、且つ教化助成せしむる趣旨にて金七十五萬圓の寄附をされた、之を以て大正三年七月財團法人輔成會を設立し、保護事業の連絡統一に關する事務を取扱ひ、直接保護の任に當らざるも間接には奨勵金を支給し指導大に勤めて居る。

今中央保護會に加入せる各地保護會は、本部三百五十支部百八十合計五百三十個所の多きに達して居る、尙資金の多少により成績如何を卜する事は出来ぬが、資金一萬圓以上を有する静岡勸業會を始め、十二個所大正五年度に於て收容せる被保護者百名以上に達せるもの、大阪の佛教和衷會、救世軍勞作館等十個所。

司法省に於ては毎年十月末に講習會を開き、保護事業に干與する人々の養成に盡力して居る、私は先日司法省に参りまして、山熊監獄事務官に面會しまして、色々免因保護に關する御話を伺ひました。

其御話に依りますと、免因保護事業を經營して居るものは重に宗教家であるで、此事業は極めて地味な仕事であるが爲め、華美を好む日本人には不向で、此事の出来始めは中々盛に從事されたが、今日では漸く放任され居る傾きがあるのは誠に遺憾千萬である、現に輔成會には七十餘萬圓の資金があるから、金には困らんが之に執掌する人が無いで困る、どうか宗教家諸君は是非眞面目に従事し、典獄と連絡をとり優秀なる好結果を收めて機しいと言ふて居りました。

然し乍ら現に此事業に眞面目に執掌され好結果を收め居る人も少くない。

- 來にけり 京都 安良 日將
- いつしかと夏は去にけむ浪華津の宵の一夜に秋は來にけり 千葉縣 福島 正之
- 和田の原波のうすきりたちそめぬ磯の家村秋や來ぬらむ 丹 後 廣 岡 圓
- 風わたる海邊をてらす三日月にいつしか秋のいろは見えけり 千葉縣 林 美し子
- まなひやにたちかへる日の近づくをありその松の調にそきく 下 谷 小柳 律子
- 朝なきに舟出はよしと嘘つる海人たちさわく秋は來にけり 下 谷 小柳 英夫
- 白浪のよせてはかへすみきはよりはやくも秋の風やたちけむ 本 郷 熊澤 優子
- 沖つ風西吹そふる荒磯の波とよもにや秋は立つらん 千葉縣 渡邊 乾航

#### ○無序列

- 夏の夜に海士の焚くなる漁火の影そゆらきて秋は來にける 房 州 中根 山人
- 海女が焼く鹽の煙のたなびきて沙どる舟に秋風ぞ立つ 日本橋 安藤 蘇南
- いそさきの浪の音さへ今朝よりはややはたさむくなりける哉 新潟縣 藤田 鶯園
- 萩の花ほころひ初めて露深き磯の小山に秋風のふく 京 都 竹木 蓮一
- 日にやけし眞砂もさめしすまの浦波のもてくる初秋の風 三重縣 辻本由起子
- 大物のうらのほとりを踏み行けたもとすましきあき風のふく 千葉縣 小川 巖司

○きのふまで夏を彩る濱松もけさは聞きけり日暮しの聲 大阪市 長尾翁之助

- 秋來ぬと海原遠くさへわたりのふにかはる風そ身にしむ 本 所 勝田 宜和
- うちよする波の淋しく音するは秋の來りししなるらん 千葉縣 野口 海印
- しほあみし人は歸りて秋風の色をそみする磯やかたかな 下 總 星野 聖祐
- 蟹か子の夏のすさひに菊りおきし玉藻の中に蟲のこゑする 綾 部 大槻助次郎
- 松かせにかよへる波の音聞けはすしき秋の風は立つなり 丹 波 上柳けい保
- 蟹か家の軒もる月のかけさえて浪によせる秋のはつ風 綾 部 大槻 致道
- いつの間に秋や來にけん此ゆふへ磯邊の松に風のおとのふ 下 總 春日よし子
- 波音の静かに立ちて初秋の風涼しくも磯に吹くかな 越 前 秋葉 春淨
- 流り子のはたか姿も見えずなりて御幸の濱に秋風そ立つ 名古屋 有田 颯陽
- 磯傳ふ風より今朝は秋立て素給ほしと思ひけるかな 小石川 松尾 清明

#### ○追加 選 者

しほあみし人は都にかへりけり 浦わさひしき秋のとひきて

#### ▲次回課題 「萩 盛」

昨年度全國保護會て收容した被保護者は、直接保護四千八百八十八人、間接保護三萬四千四百四人、合計三萬九千九百二十八人の多数に達して居るのを見て、敢て悲観すべきでないが、之に満足せず尙一層の努力をして欲しいものである。

要するに保護事業は数字を以てどの位の効果が有ると言ふ斷言は出来んが、果犯者の増加を防ぐ効果の存する事は事實である、一人にても犯罪者を減するのには邦家の爲め慶すべき事であり、又社會改善の爲めにも是非此事業に盡力して欲しいものである。(5、12記)

### 誰罪偶語

野口 K 生

▲現代の青年 若くは青年の氣性を失つて居るとは事實である。其早熟めいた。大人びらしき、利己らしき態度は紳士的青年として見て或は喜ぶべきものであるかも知れぬが、其實は消極的な沈滞性であつて而して之等が惡思想にも罹りやすいのである。

▲都會の青年 よりも田舎の青年の思想と氣分の落差は、國家興隆に對する確實な基礎であることは私の信ずるところである。而してこの地方の青年の團體が沈滞して何れも消滅せんずる有様は其個性たる青年の消沈に導出することは止を得ない。

▲尚ほ氣概の ある者があつて、進んで盡すところあらんとするに際して、寧ろ獎勵すべき地位にある人にして却つて陰に邪覺立をするばかりでなく、甚しきに至つては嘲笑の態度のあるのは怪しからぬ次第である。

ある。これ等の徒は正義の反逆者として觀たい。

▲日蓮聖人の 『正しき弘法に對する反逆者は善知識と見てよい』の御言葉を見た時に、之等反逆的者輩に對して眞惡の心を生ずると共に、自己の一層奮勵すべき勇氣と信念の培養に思ひ至るのであつた。(秋山女史の通信を讀みて所感を記す)



### 宇都宮修養講話會

宇都宮軍人會、安國會にては海軍大學校長佐藤鐵太郎閣下を招聘して國民修養の講話をなし、以て其地方の人心を涵養せんとするの素望あり、過般この承諾を得て二十七日午後一時縣立女子師範學校に於て開會せり、先づ軍人分會長砲兵大佐安東城氏は開會を宣し、紹介を以て本誌松尾城主筆登壇し『外來思潮批判』の題下に民本、個人、社會、實理等の主義思想を批判し皇國の公道を暴瀆して降壇、次に當日の主眼者たる佐

藤將軍登壇『立正安國』の題下に先師聖日蓮の憂國の實情より説きて現下の惡思想を排し正義を高調して安國を論ぜられ降壇さる。此日炎熱甚だかりしも滿堂の聽衆は微動だせず聽き終り、聞くところに依れば當日の盛會なりしは同市未曾有の事なりしと。本會開會に就ては安東氏、安國會幹事久保井倉吉、夢倉竹次郎、佐藤豐太郎、瀧澤佐市、中村温男諸氏の協力あり、外に野島前縣會議員、高橋鐵道院書記、石井、田中兩砲兵少佐、白井中尉等の参加ありて諸事整頓を見たり、記念の攝影終りて清宴を張り散會したり

### 統一團青年會の遠征

青年會幹部は夏季を利用して地方へ布教的遠征を試みることを決議し、二十七日は佐藤將軍に從ひて宇都宮の講演に赴きたるが、次回は互相地方へ遠征する都合なりと、同行者は高木本順、窪田貞二、高橋辰二、丸山中庸、野島連平、齋藤重司、穴倉諭一郎、山田豐次郎、藤井利一の諸氏なりき

### 豊橋立正會の設立

同地妙圓寺を中心とする檀信徒發起となり、立正會と稱する日蓮主義研究會を組織し、七月二十日井村僧正を招聘、其第一回を開催し左の講演あり

- 立正會設立の趣意 文學士 滿井信太郎君
- 日蓮主義研究の各方面 僧正 井村 日成師
- 滿井文學士は立正安國論述作の因由より延て會名の趣意を述べ、井村僧正は日蓮主義研究の綱領を秩序整然辨ずること二時間多大の感興を興へ、終つて茶話會を開き、午後十一時閉會せり、當日出席會員は、加藤吉橋兩族團長、安井、川口兩中佐、長野少佐、細谷市長等知名の士十八名なりしと

### 立正會規

- 一 本會は「立正會」と稱す
- 二 本會の目的は日蓮上人の人格及主義を鑽仰し併せて廣く國民思想を研究し以て各自の修養に資するに在り

- 三 本會の趣意を發するものは會員の紹介に依り幹事會の承諾を経て本會會員たることを得
- 四 本會は毎月第三土曜妙圓寺に定會を開く
- 五 但し幹事會の決議に依り臨時會を開備することあるべし
- 六 本會は當分會費を徵集せず
- 七 但し幹事は會員の互選に依り之を定む
- 八 本會事務所は清水町妙圓寺に置く

### 立正會會員氏名(ローハ順)

市會 實業家 服部 彌八	第四中學 高橋 聖四郎
實業家 服部 平之助	實業家 曾田 良吉
實業家 服部 源助	步兵少佐 長野 親信
實業家 服部 泰吉	實業家 長尾 謙三
實業家 服部 英一	實業家 井上 文作
實業家 細谷 忠男	實業家 黒川 莊次郎
實業家 戸田 御吉	實業家 倉橋 源平
實業家 豊田 通泰	實業家 矢崎 茂
陸軍少將 加藤 豐三郎	步兵中佐 安井 信胤
實業家 加藤 國順	僧侶 松本 堅晴
實業家 加藤 洋平	實業家 木村 爲吉
步兵中佐 川口 金之助	第四中學 滿井 信太郎
實業家 神田 德四郎	論文學士 柴田 豐水
陸軍少將 吉橋 三郎	步兵中佐 白石 庄次郎
實業家 横田 常次郎	

## 統一 俳句欄

- 題 天の川
- 大敷や斜にかゝる天の川 京都 遠々庵
  - 長城の北へ響いて天の川 同
  - 腹洗ふ五山の僧や天の川 同
  - ▲評 服てはあるまい、やはり腹でなくてはならぬ
  - 更けて行大湖の上や天の川 同
  - 七寶で賑はるゝ國か天の川 常陸 孤松子
  - 望郷の海に注ぎて天の川 青森 惟池
  - 遣はぬ間に袖ぬらし鬼天の川 上總 降雨
  - ▲評 川より落つるしぶきしきりて露となり待つ間の袖のそほぬれたのであらう
  - 老杉の高く揺きて天の川 同
  - ▲評 極景雄大の氣を呼ぶ
  - 渡り行く雁の見ゆなり天の川 同
  - 雲一つ早足にして天の川 同
  - ▲評 果して然らば迷ひ雲であらう
  - あれ天に川があるよと子供哉 同 笑月
  - ▲評 右五句は上總の眞俳句會の投稿である。孤峯、渭水、土方無坊の三君のは失敬しました。以來毎會投稿を乞ふ
  - 噂する人も來りて天の川 慶山
  - 暗に置く春中の冷や天の川 同
  - 風絶えて船は止まれり天の川 印旛 秋月
  - 露落ちし梢黒みて銀河哉 同 青森
  - 天の川下界の釣の浮沈む 同 黄雲
  - 草薙り終へて腰伸すや天の川 同

- 架の雷天の川見て明しけり 同
  - 門かたく閉めて奴や天の川 神戶 鳩堂
  - ▲評 奴の味を最も豊滋に現したものである名吟
  - 米かしく船の女房や天の川 同
  - 雨へゆく病人ほそし天の川 同
  - 斯過けて驚恐ろしや天の川 同
  - ▲評 奇想
  - 工事終へて息づく天の川を見たたり 巴詩女
  - 山と山とどまに更けて天の川 同
  - すなとりし素足男や天の川 尾州 瀧陽
  - 銀窟にころぶ狐や天の川 成東 鶴江生
  - 天の川名盡の直論しけり 同
  - 利根尻の音なく更けて天の川 同
  - この島の物語あり天の川 同
  - ▲本月は青村、直水、光風、鳥鬼子等諸雅兄のを見ず遺憾
  - 銀河境に新星発見すと聞きて
  - ▲天の川新屋五百年を青光る 評者 鼓城
- 題 尾花
- 寺近き尾花や畫の古狐 惟池
  - 探り得て尾花に偲ぶ遊女の禪 同
  - 塔一基尾花に歴史物語る 孤松子
  - 空高く月澄みわたり尾花揺る よし雄
  - 雨やみて尾花静かにも小舟哉 軽舟
  - 尾花生ふる陸に釣すもたけり
  - ▲以上四句眞俳句會の句なり、降雨、土方無坊、孤雲、孤峯、笑月諸君のものは失敬したり(此の葉又)なりなどは語路合せのやうにて禁。又若は越稱なり、尾花は蓮花を指す又謎のやうなるは禁。又理屈のもの等ありたればなり。しかし諸君以後大に奮つて多数の送吟あらば其中自ら名句あらん、力められよ
  - 尾花から二丁隔てゝ橋暮るゝ 遠々庵

●學生實習布教(其二)

福本法華宗夏期學生實習布教團東海道組は小島沈明、淺井玄哲、富元會榮の三師にして關田日城師補導として之を率ひ、七月三日は見付支妙寺にて(聽衆五百餘)、四日は刈谷長遠寺にて(聽衆五百餘)、五日は緒川越境寺にて(聽衆百餘)、夜は緒川小學校にて(聽衆百餘)、六日は豊橋妙圓寺にて、夜は佐藤重賢師の加はるありて何れも聽衆百餘名、七日は古妻妙立寺にて(聽衆三百餘)、八日は松野妙松寺にて何れも法益するところあり、演題は關田師の信仰の實生活、小島氏の現代人心の傾向、淺井氏の宗教の必要、富元氏の日蓮主義と眞の幸福、佐藤師の四恩報酬等なりしとなり

●同(其二)

實習布教東北組は七月三日書字都宮法華寺にて開會す、聽衆約五十名、信仰の必要を、古塚通暎、知恩報恩を、古谷幹夫、日蓮上人の御心を、長谷川義一の三氏講演し、最後に日蓮主義に就てを輔導たる木村日保師演説せり、  
○四日は日光の名所遺蹟を探りて得る所多し  
○五日は會津なる什祖の遺蹟及び白虎隊の墓に詣つ  
○六日午前中は羽黒山東光寺跡、お釜岩を觀て東山温泉に浴す、午後演説ありて聽衆約八十名、古塚、古谷長谷川の三氏に續きて木村日保師は什聖改宗の理由を講了さる

●統一團日曜講演

七月七日晴  
心を従へよ  
松尾 鼓城

日蓮主義の意義

日蓮上人の意義  
聽者 九百餘拾名  
以下日曜講演は暑中には夜間開催する事となり、而して講演は各方面より觀察する事を得るものを決定し九月一日迄左講題にて講演せらるゝ事に決定す  
「日蓮上人の人格を中心としたる修養訓」

- ▲七月十四日 晴 松尾 鼓城 野口 日主
- ▲七月廿一日 晴 高木 本順 山根 日東
- ▲七月廿八日 晴 大森 體男 森川 日修
- ▲八月四日 晴

●京都七月中布教日誌

- 一日 本山國禱會、教説 銀井 乾升
- 二日夜 護正會、善量品讚講 萩原 啓門
- 五日 神戶護正會、日蓮上人教義一斑 銀井 乾升
- 八日 成徳院婦人會、相承論 清水 一乘
- 九日 正行院婦人會、日妙御書に就て 萩原 啓門
- 九日 同惠會北村宅、講話 萩原 啓門
- 十三日 世界最高の宗教 萩原 啓門
- 十五日 本山婦人會、説教 萩原 啓門
- 十五日 同志會明德學園、佛力 萩原 啓門
- 十六日 本尊論 萩原 啓門
- 十六日 法光院婦人會、化城論 萩原 啓門

●大阪堂閻寺教報

七月六日土曜を演ず津田旭派、十二日宗旨建立を演ず津田旭派「悲哀より歡喜へ」を京華義應、龍口法華を演ず津田旭派、二十一日「三難九易」を上田布教師、何れも盛會多大の功果を奏せり

●備前和氣教報

七月三日通夜修行をなし、不動の信仰を、二十日婦人會を催し、現身の成佛を、二十二日海軍河内艦隊死者追悼會を催し、殉難の感想を、三十日は明治天皇御道福會を執行し御功德を歎すを右何れも原田勇師講演せられたり

●福井妙經寺教報

去る六月廿三日、管長大僧正本多日生現下、野口權大僧正、國友僧正等御出席、明治大帝七周年報恩音樂天童大法會を謹修し、當日參詣者八百餘人にて實に盛大なりき、次第は午後二時より、管長大僧正本多現下の御親教あり、同三時三十分より、野口權大僧正の御親教あり、同四時より、智識階級の爲め、管長現下は、市會議事堂にて、精神修養の大講演あり、聽衆一千餘人なりき、午後八時よりは妙經寺に於て、常樂院日經上人三百年紀念大講演會を開會、聽衆五百餘人にて左の演題講演なりき

●山陰教信

市橋家庭講演は六月一日を以て開始され、一門の老若三四十名は朝會師の懇切なる説法に隨喜法悅の唱題裡に信仰増進す、第一回は「聽法の功德」第二回は七月十五日に「信仰の體性相」なりき  
◎宗教學上より觀たる日蓮主義本尊觀は朝會俊達、法

○夕煙る家は尾花にかくれけり  
○吹風に吹かせてやすき尾花哉  
○尾花さして嫁入る野路の狐哉  
▲評 給草紙又はおとぎ譚類に寄せたるにや、或は又諷刺にや  
○尾花から法螺貝吹くや里の人  
○出る月に一節かゝる尾花哉  
○葉の月の主はいはれず尾花哉  
○橋守に情人のあり初尾花哉  
▲評 慶山老人近來の名吟と拜誦す  
○植もせぬに義民の墓に尾花哉  
○開かれぬ原一面に尾花踏る  
○廢城の堀は埋れて尾花咲く  
○廢驛のレールは錆びて尾花咲けり  
○孕帆に日あたりそよぐ尾花哉  
○地蔵尊の面なぶる風の尾花哉  
○庵を繞る尾花やまじ猫に似て  
○井月側の半分朽ちて尾花哉  
○家跡の一叢白き尾花哉  
○野路行けば風の吹きて尾花飛ぶ  
○斥候の一隊隠す尾花かな  
○小松混りて白々と尾花哉  
○路尾花佛具車の上より尾花見  
○潤れく野となる流れ尾花見  
○長夜きく尾花の雨や無住寺  
○宵覺めの窓うつ尾花風立てり  
○尾花盡きて村へ入るみち地蔵  
○風尾花一鳥飛んで矢の如し  
○殘夢多恨旅愁や尾花月夜なり  
○暮れ残る馬が顔出す尾花哉  
▲草臥て尾花に雲の御拾ふ 鼓城軒忍水  
▲次回俳句課題 (メ切月末迄)  
菊合 (きくあはせ) 菊花を集め其優劣を定め勝負すとなり。開菊とも書く。例に、菊合

南瓜 (ぼろふら) 京にてカボチャ、大阪にてナシケン、東京にてタウナスと云ふ(秋季)  
●新しい句 堀江 生  
風ふる大樹秋となる葉摺れあり  
やりに水に花みなをきてよみがへり  
水濡れの川床に秋の魚力弱し  
秋風吹くとなり試運轉の汽車  
たゞきし繩木の上によみがへる

午後零時より講演、朝會住職の晋山の辭に次  
◎水魚の親み 中川 日史  
了りて市橋家よりの供養心盡しの饗宴は本堂の廣間と庫裡の客間に開かれ、鳥取吉關金青より隨喜參列の桔梗、林、廣瀬、瀧本、野崎の各師等、能仁、中川、堀の來賓も檀頭市橋藏藏氏一門の幹旋にて歡を盡し檀信徒は未曾有の法會に前途の光明を祝し、泊より七十三歳の老母來會したるなど以て盛會を推すべし各地より祝電祝詞を寄せられたるは左諸氏  
廣島市島田師、山口縣坂井師、姫路市吉永師、千葉縣吉見師、富田俊達師、九州出海師、京都金光師、由良杉村五百造氏等なり  
三日より山陰各地の講演は日蓮號に中川文學士の報道ありし事なれば略す

七月八日 東伯郡東郷學校青年大會にて  
◎開會の要旨を佐々木校長◎信念と犠牲觀念を朝會俊達▲七月十七日、同郡花見小學校婦人會にて◎開會の辭を校長中西秀雄◎理想美の發揮を朝會俊達◎女子教育を倉吉女學校校長中西次郎▲二十一日、西伯郡御來屋名和公園清淨院にて◎宗教心に就てを遠藤幸園◎精神の力を朝會俊達▲二十二日、東伯郡東郷學校婦人會にて◎女子の心得を佐々木校長◎教訓歌を森田村長◎女子教育の根柢を朝會俊達▲二十七日、同所男子同窓會にて◎會員に對する希望を倉吉市橋昌晴◎時代の思潮を論じて地方青年の奮起を促すを朝會俊達▲二十七



るの風あり、其師父に對するや至恭至誠感慕恩義の念極めて深く、人と交るや其の禮を失せざるやを思ひ、其の窮者貧者に對するや衣食を節して救護大に努む、長して花道俳諧に通じ、俳石を蕉下庵涼我と稱し、帝都佛壇に宗匠として其名地方に高し、又手工に巧し上人一度其靈腕を振ふや大小の器具忽然として顯れ杖巧家門家を後に後著たらしむ

師十歳宿願深恩の致す處か、進て佛門に投じ、千葉縣内田村本傳寺住職横左内日康師を師とし、剃髮染衣す、須臾にして日康師法門會友の弟子となり、日夜孜孜として行學の二道を勵し、福徳大に誦め、齡二十一歳同縣内田村法圓寺住家の飯依により始て同寺に住職す

時は明治維新創始にして、排佛の聲盛なりしも、上人奮々落落諸論を弄して寺僧を教化し、破壞の寺門蓋觀に復すを得たり、明治二十三年八月千葉縣長生郡桂安寺住職となりて師跡を繼紹す、明治十二年二月二十日教導試補に任せられ、同十八年六月學士補に、同三十七年十月少學統に、同四十二年九月大學統に果進す而して明治三十年六月十日日本宗務長現下の命に依り當正法寺に住職せらるゝや、當寺は維新の變革に遭遇し、檀家地方に四散すると共に、二代の住職其人を得ざりし爲か、堂宇破廢其影の認めず、僅に一小庫裡の雜草雜々たる間に存し、壁落ち床朽て竹の子屋を買ひし僧の住むべき寺とも見へず、其荒廢の狀體憐見るに堪ざらしむ、入寺赴任の日なりと覺ゆ、上人の法友上人に告て曰く、三日能く此の寺に在任するを得ば幸なりと、即ち不日退寺の止なきに至るを願せる者、其悽慘の狀又察知すべきなり、然るに上人當寺に住職するや、千思萬慮寺門の興立を企圖し、窮蹙復舊を祈願せり、然れども檀家極て少數にして願望徒に大に、上人の希願十が一も能く實現し得るや否やを憂へたりしに、至誠佛天に通せし者か、檀家信徒は上人の祈願に隨喜し、本堂建立を發金し、多大の全力と努力を喜捨し、其工事に着手するや、遠近の特志家又上人の徳風を慕ひ、義金を寄せらるゝ者少からず、故を以て事業

大に進み、大正三年秋九月宛く竣功に至れり、此の間小林、高木、森川各代小川建築家努力の改す處あるべしと雖も、上人日夜の奮闘結集經營の然らしむるは論なき處なり、本堂落成の報本宗々務廳に達するや、管長親下は其功績の偉大なるを賞賛せられ僧階權僧都に昇叙せられ、此の大經營の酬ら本宗教學財團の淨業を翼賛し多大の淨財を寄附し、二等功勞章を授與せらる

本堂既に建立せられ、輪換の美四隣を輝す者ありと雖も、上人猶足しりと爲さず、進んで庫裡建築を企圖し、檀信を勧説し、寄附の金額再集に着手するも支障なきに至るを以て既に起工式を執行せり

然るに願らざりき、師範門會友要師本年四月二日八十九歳を以し遷化せるの悲報に接し、送葬の手配善後の所置一に上人に依りし所辨せらる、時健康當の如くならざるに此の悲傷に遇ひ、悲歎の涙或は異常の心身を害する多かりし者か、爾來企圖する處深大なるに關らず、身體舊の如くならず、嚔を招き嚔石を事とせり然るに去月廿八日師範住職寺の兼務を命せられ、病を冒して赴任の儀式を行ひ、更に師範要師百ヶ日取越の誓みたり、爾來病増進するの風ありと雖も上人意に介せず、庫裡再建に熱注せしが、本月八日病頓に平ら臨終に近ける者の如くなりしが、上人法弟家族を枕頭に集め、後事を告て曰く、余死すも庫裡は再建せよと云終りて一言他事に及はず、玄機を口唱し頓に化を他界に遷さる、世壽六十有五才、上人の希願未だ全を遂せずと雖も、正法寺今日あるに到れるは實に中興の祖と稱するも過言にあらず、上人又瞑目するを得べき也

茲に本月本日を下し上人本葬の儀式を行ふに當り、香華燈明淨唱唱頌仰も上人の増進損生の資糧に供つ、願くば佛陀三寶愛戀納受し玉はん事を南無妙法蓮華經大正七年七月廿七日  
檀大僧正 今成 日警 敬白  
矢野登美子刀自逝去 日蓮主義大外護者と

して知られたる檢事矢野茂氏の北堂登美子刀自は本宗の信仰に安住し、女信者の模範として見られたりしが本月四日僅に數日の病氣にて眠るが如く唱題中に臨終せられたり、行年七十有五才なり、其本葬は六日清島町第一閣に於て嚴修し、大僧正本多日成の二師なり、今成、關田、笹川、山根、鈴木、國友、山名、小西、山田一英等の諸師も亦法儀陪席し尤も盛儀を極めたり、大導師の導章終り、野口師の敷文終り、特に喪主の請に依つて本多親下の一席の講演は深き感動を興へたるが如し當日の弔辭は牛首聖園會、講妙會、天晴會、村雲婦人會、統一閣、地明會、佐藤中將等にして、又重立たる會葬者は、松室司法大臣、横田大審院長、岡松博士、鈴木博士、山田大學教授、柴田宗政局長、小笠原子爵、宮岡中將、高橋中將、水島、鶴見、柳川、鶴の各大審院列事、小山、林、板倉、河西の同檢事、松本、伊崎、千秋、小原の將軍連、柳田貴族院書記官長、成瀬仁藏、江木真、井上電氣局長、根岸治右衛門、安達憲忠、松信定雄、久富、吉田、松木、牧野、磯男の各辯護士、市原、岩野、西端、水上、小野金六等の諸氏なり

歎 德 文

南無本門善量の本尊別未法大導師日蓮大聖人等御納受技に送葬の儀式を營む  
光嚴院妙喜日淨大姉は  
舊熊本藩歸天院殿矢野茂氏の息女、十六才、清治院殿吉藏氏を迎へて家を嗣ぐ、十八才夫に永別してより一子弟妹を助けて家事に務む、遂に弟茂氏を子として家を嗣ぐ、雖然時王政新に際し茂氏國事に奔走又處々に轉住、寧處に追あらず、其間子女の調育及家事を助け、眞に五十年一日の如し、茂氏今日國家に對し赫赫の功勳を建てるに到りしは、令夫人及靈也の力與て功ありと謂つべきなり、晩年茂氏と共に深く日蓮主義を信じ、其の宣傳の外護に任じ、靈也は主人謹識して法蓮に連し及家庭にありては日蓮主義を以て子孫調育を以て日課と爲す、然るに 月未偶病を得、醫藥其效

なく、本月四日午後四時二十五分行年七十有五歳を今生の一期として臨終正念了ぬ、嗚呼哀哉、雖然法華經信仰功徳に依り、遂に靈山淨土本佛釋尊の膝下に詣り、四徳波羅密の覺月を誦し玉はんこと無疑、經云唯我一人能爲救護、又云每自作是念以何令衆生得入無上道速成就佛身依て歎徳文如件  
大正七年八月六日 統一閣葬儀席上  
事智悲院日主

○醫科用印刷物一般  
○醫科器械 一般  
東京本郷區 高進堂  
春木町二丁目  
○實用安全眼縋帶製造  
○新案複寫式届用紙發賣  
○全國各病醫院御用達

高野醫院  
小石川區 白山前町

布 眼の藥 效能、たゞれ目、かすみ目、うち目、つかれ目、はやり目、トラホーム等  
定價壹瓶、拾錢、廿錢、卅錢、五十錢、八拾錢、壹圓  
布 血の藥 定價壹袋、拾錢、貳拾錢  
田 產後、めまい、たちくらみ、時候あたり、氣絶、のみすぎ、酒毒、婦人病、貧血疾、風邪、千葉縣山武郡源村上布田參百番地 藥王寺

布 眼の藥 本舖 齋藤 日章  
田 血の藥 本舖 齋藤 日章  
(御注文は總へて下記振替に)  
(振替東京第六七九一番)

日宗法衣專門 青雲帽 青雲帽 青雲帽  
飯田法衣店 京都市佛具屋町五條北  
振替口座大阪大座四八七  
本誌掲載の廣告店は皆信用あり確實なる良店舗なり御信用の上御注文あれ

日本橋區坂本公園 加賀 加能 亭

位牌木魚卸小賣  
御來店之節ハ陳列場へ  
御來車被下度は迄トハ  
一層勉強仕り  
佛具一切陳列仕置候



各本山御用達 佛像佛具 一切卸小賣  
定價表郵稅四錢  
小賣部 京都三條小橋東入南側  
三法堂佛具陳列場  
長距離電話中貳七八參番  
振替口座 東京貳〇七壹  
大阪四貳五九  
卸部 京都市三條通小橋西入  
本舖 三法堂 藤田總治



(號三十八百二第)

經から觀た國、國から觀た經 主任 松尾鼓城

軍人と修養 大僧正 本多日生

日蓮聖人教義綱要(第十三回) 僧正 井村日咸

法華經流布の時代 文學士 小林一郎

機微譚語 怨靈平凡 山根青村  
六四 六五 六六 二絶の佳品

課題和歌「萩盛」發表 子爵 清岡長言選

統一俳句(題南瓜、菊合)發表

本誌記者に與ふる書 在大連 江見乾丈

所輯編一統町前山白川石小京東 所扱取務事行發  
▶番三三五三三京東座口替振◀

著師生日多本 正僧大

覽天賜 大藏經要義

菊判洋裝上製函入美本 正價各壹圓八拾錢 內地送料  
三方金每卷四百頁以上 各拾貳錢

大方廣佛華嚴經(八十卷) (一)華嚴經の大觀 (イ)總論  
(ロ)此經の位置 (ニ)此經の教主 (三)此經の說時、說處、說者  
(ハ)華嚴宗の略歴 (ニ)華嚴宗の判教 (ト)華嚴宗の教後 (チ)傳  
教の批判 (リ)日蓮の批判 (ヌ)予の華嚴觀 (二)此經の傳  
譯 (三)此經の譯者 (四)此經の五玄 (五)此經の傳  
通覽(六)要文の講述

○本書は隔月發行十八卷(三ヶ年)完結、一ヶ年前金九圓、半年間五圓、送  
料不要、卷八迄三百三十六圓九百五十七圓、卷六迄三圓、既刊目次左の通  
井上(智)博士叙 佐藤中將序 佐藤中將序  
德田春樹序 德田春樹序  
那地親經 仁王經 大法鼓經 阿闍梨經 阿闍梨經  
守隨經 報恩の道德と義務の道德(楠崎博士)

七卷	佛行本起經等六經 (六十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷)	佛行本起經等六經 (六十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷)
六卷	佛行本起經等六經 (六十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷)	佛行本起經等六經 (六十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷)
五卷	佛行本起經等六經 (六十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷)	佛行本起經等六經 (六十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷)
四卷	佛行本起經等六經 (六十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷)	佛行本起經等六經 (六十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷)
三卷	佛行本起經等六經 (六十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷)	佛行本起經等六經 (六十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷)
二卷	佛行本起經等六經 (六十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷)	佛行本起經等六經 (六十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷)
一卷	佛行本起經等六經 (六十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷)	佛行本起經等六經 (六十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷) (五十卷)

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可  
大正七年八月十五日發行(毎月一圓十五日發行)

統一事務取扱 東京市小石川區白山前町 統一編輯所

▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所(▲本誌定價一冊) 發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯所發行所松尾英四郎印刷所(▲本誌定價一冊) 十錢郵稅五圓

版五日蓮主義 三五判洋裝函入眞蹟挿入 美本六百五十頁 正價金九拾五錢 送料六錢

次目 一、宗教の必要と其選擇 二、神佛三教と日蓮上人 三、國民道德と宗教の信仰 四、統一的佛敎觀 (付録)本經、祖書要文 六、釋尊の出家成道 七、佛敎の體系 八、法華經の體系 九、日蓮主義の體概 十、終法次第

版四修養と日蓮主義 三五判洋裝五百六 十頁其他正價送料 共同斷

次目 一、日蓮主義の主張 二、社會問題と日蓮主義 三、修養と日蓮主義 四、日蓮聖人と女性 五、日蓮主義より見たる大涅槃經 六、日蓮聖人の信仰 七、日蓮主義の使命 八、日蓮主義の體道用道

版再國民道德と日蓮主義 三五判洋裝 四百七十餘頁其他正價 送料同前

次目 一、日蓮聖人の觀たる我が國體 二、國民道德と宗教の信仰 三、國民道德と模範的人格 四、國家觀の根本問題 五、修養の三方面 六、佛敎の理想的文明 七、日蓮聖人遺文の一篇

人と教 四六判洋裝函入眞蹟挿入假附美 本三百八十餘頁正價金壹圓貳拾錢 送料八錢

次目 一、人と教 二、精神の修養 三、三大思想の系統と調整統一 四、教育と宗教 五、佛敎の信條 六、法華經より見たる佛敎

版再法華經の心髓 四六判洋裝假名附四 百二十頁正價八十錢送 料共

一名如來壽量品統釋 項目八十八ヶ條

大藏經要義刊行會 東京市外南品川妙國寺内(振替東京三一五九六)

年九月大學林會計長兼宗務所會計師同二十二年九月  
第六教區管事に、同年十月大學林創立委員長に、同廿  
四年五月教務部長に任命せられ、越へて同廿七年には  
宗務總監兼教務部長として一宗行政の首領たり、而し  
て翌廿八年八月大學林長を兼任し、同廿六年三月第九  
教區管事任命年千葉縣支林長として、傍ら大綱實  
業補習學校を開創して教育家の社會公共事業に努力を致  
し、金圓を發掘せしこと、牧學に造らざらず、就中成田山經  
營の後を受けて千葉縣成田院の院長として免因保護の  
難事業に當り、或は千葉監獄の教誨を擔任せる各宗說  
教團の總理となり、後御大葬の事あり、時代の要求は  
千葉縣各宗協會を創立するや、推されて之が會長とな  
り、或は宗門教學に或は村教育に、或は赤十字社に、水  
難救濟會等實狀記念品の贈與を受けること頗る多し。  
されば宗門は明治六年教導職試補より、同廿一年一月大  
僧正に昇格せらる、其の都度僧階の進級を行ひ、同四  
十年三月三等功勞章を同四十二年五月二等功勞章を以  
て其の法勳を表彰せり、特に上人一代の美點として自  
他共に羨望稱揚したるものは、實に育英事業に滿身の  
工夫を致したるにありき、宜なるかな門下の多士濟々  
宗内一流の好法將を出したる、各其の技に隨ひ宗門に  
貢獻しつゝあることを、嗚呼上人八十年の生涯を回顧  
して其の勞績叙すること僅々數項のみ、然れども近年  
未曾有の盛典を以て其の葬を當み醍醐法味を擧げて靈  
前に供ふ、上人の靈位亦以て自受法樂せん也、仰ぎ願  
くは別頭三寶高麗大聖人天慈大慈哀愍納受し玉はんこ  
とを、聊か兼辭を列ねて敬呈草とす 恐首再拜  
繼時大正七年十一月十二日  
徳師宗法儀總代  
宮川 光 照 泣 拜

●篠原倉三郎氏の逝去 山武統一團理事なる  
同氏は同郡東金町家篠原蔵司氏の長男にして、早  
稻田大學卒業以來、文學哲學に政治に宗教に多方面に  
研鑽を重ね其造詣も至つて深かりし、殊に本多大僧正  
の法華經の真髓を披讀して以來、大に邪教の非を認

め、今春本團の設立せらるるや、進んで其理事の任に  
あたり又地方發達教團起の爲尙風會にも盡力せられ  
將來大に地方の爲有力の士なりしが不幸流行性感冒の  
爲十一月廿五日三十八歳を今生の一期として逝去せら  
れたる實に痛嘆に堪えず同月廿七日自宅に於て、西福  
寺山岡僧正法光寺成島僧都兩導師にて音樂の葬儀を行  
ひ會葬者三百餘名尙支部長として成島師の弔文ありた  
り。

**日宗法衣專門**  
青雲帽 青布 青布 青布 青布  
**飯田法衣店**  
京都市佛具屋町五條北  
振替口座大阪大座口四七

**佛像佛具 大販賣所**  
位牌木鉦 宮殿幢幡天蓋一式  
●各大御本山御用達  
御來店の節は陳列場へ御來車被下度是迄とは一層  
勉強仕り茲  
贈品一式陳  
列仕置候

郵税四錢  
定價表ハ御一報  
次第送呈可仕候  
小賣部 京都三條小橋東入南側  
**三法堂佛具陳列場**  
長距離電話中貳七八參番  
振替口座 東京貳〇七壹  
大阪四貳五九  
卸部 京都市三條通小橋西入  
本舖 **三法堂 藤田總治**



### 新年廣告

本年は新年廣告は御依頼なき分は斷じて  
掲載せず、故に御希望の方は一月の五日  
までに必ず御申込を乞ふ、其後のものは  
御斷り。掲載料金は一月に限り五號活字  
十八字詰三行一人分として金五拾錢（前  
金）に割引す（平素は三行）送金方法は振替口  
座東京三三五三三番に願ひます

統一會計部

**布眼藥** 效能、たゞれ目、かすみ  
目、ぼし目、くもり目、  
ち目、うち目、つかれ目、はやり目、トラホ  
ム等  
定價壹瓶、拾錢、廿錢、卅錢、五十錢、八拾  
錢壹圓  
**血の藥** 定價壹袋、拾錢、貳拾錢  
效能、男女老の道、産前  
産後、めまい、たちくらみ、時候あたり、氣  
絶、のみすぎ、酒毒、婦人病、貧血疾、風邪、  
千葉縣山武郡源村上布田參百番地  
藥王寺

布眼藥 **本舖 齋藤日章**  
田血の藥 **本舖 齋藤日章**  
（御注文は總へて下記振替に）  
（振替東京第六七九一番）

日蓮各宗 寺院 御僧  
法衣 草木 直に御聯想下  
京都 三條通鳥丸東入ル町  
**草木本店**  
電話中七三五番  
振替口座東京一一五五九番

東京淺草區三好町二番地  
**草木支店**  
電話下谷三四三四番  
振替口座東京二四五六八番

●初も神佛具を調製する敬虔心を以て奉事仕候●  
**佛像佛具 調度所**  
位牌木鉦 宮殿幢幡天蓋一式  
▲普通品定價郵券貳錢封入送呈  
總本山妙滿寺  
總本山本國寺  
日宗各教團  
京都寺町四條南大雲院前  
**辻井岩次郎**  
振替大阪八一五七番  
電話下三三二五八番

●御用仰せ被下候は、丁寧深切を旨と致候●  
多少に限りず御  
用奉願上候也

●生花教授（生花、投入）  
毎月土曜日午後正一時より統一閣に於  
て生花を教授して居ます、規則入用の  
方は、小石川白山前一七統一編輯所へ  
御申込みなさい。

日本橋區坂本公園  
加賀 **加能亭**  
料理

交換廣告及義務廣告御斷り

●念珠ならば小野嘉助店へ  
日蓮宗各本山御用達  
願本法華宗妙滿寺御用達  
**御念珠 各種**  
弊店の特色は實用を旨とし從來  
調進仕り候へば多少に不拘御用  
命願上候  
京都市寺町通蛸藥師下ル  
**念珠商 小野嘉助**  
電話中二六〇八番  
振替口座大阪一九七二〇番

大僧正

本多日生師撰述

覽天賜

# 大藏經要義

文學博士 井上哲次郎先生叙  
海軍中將 佐藤鐵太郎閣下序  
文學博士 姉崎正治先生論文

全十八卷

菊版洋裝上製  
三方金線刷入  
每冊四百頁以上  
改正定價各冊  
金貳圓四拾錢  
送料各十二錢  
既刊 自一卷至十卷

東京 本町 博文館

## 第十卷新刊

本書は大藏經中重要な經典約壹千餘卷を撰出して其の組織と綱要とを簡明平易に講述し、且要文を翻譯して詳解を附し、醇乎たる宗教的の妙旨、周到なる道德的の教義、深遠なる哲學的の真理、微妙なる人生訓を闡明し來つて一般人をして浩瀚なる一切經の要義を公正に會得せしめんとする空前の大著也。大藏經は佛教各宗の源流にて復是東洋文明の最高權威たるは論なき所、今や新文明の創建に進むに當り歴史的思想の傳統を踏襲するの必要に迫れるの時にこの大著に接す。心ある國人は擧つて本書の出現を歡迎すべきなり。(大正六年)

既刊目次 本年七、八月本誌廣告に掲ぐ

日蓮主義綱要

本多大僧正著  
正價壹圓六拾錢  
送料八錢

日蓮聖人正傳

本多大僧正著  
正價壹圓六拾錢  
送料八錢

高山樗牛と日蓮上人

姉崎文學博士編  
正價壹圓五拾錢  
送料八錢

淫祠と邪神

和田文學士著  
正價壹圓  
送料八錢

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可  
大正七年十二月十五日發行(毎月一回十五日發行)

統一事務取扱

東京市小石川區白山前町

統一編輯所

▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所(▲本誌定價一冊)發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎(▲印刷人鈴木日雄(十錢郵稅五厘)▼)